

# 水稻「滋系58号」における穂肥時期の検討

小久保 信義・大場 功・山田 善彦

「滋系58号」はコシヒカリのプロトプラスト培養変異株の中から育成した新系統である。早生のうるち種で、良食味で短稈という特性から注目されている。

そこで、本系統に適した栽培方法を探るため、収量・食味の両面から穂肥施用法を検討した。

## 1. 方法

- 1) 供試ほ場 場内222号田
- 2) 移植日及び移植方法 5月1日 稚苗 乗用田植機使用
- 3) 品種または系統 滋系58号 比較)コシヒカリ
- 4) 調査項目 生育調査, 収量調査, 品質調査 食味調査(食味計・官能)
- 5) 試験区の構成

施肥体系	基肥	追肥(月日)	穂肥施用時期(出穂前日数)				合計
全層	6/20	7/12 -21	7/19 -14	7/26 -7			

施肥体系	出穂期(月日)	成熟期(月日)	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/㎡)	粒重(g)	同左比率	一穂重(g)	登熟率(%)	千粒重(g)
滋系58号										
1:穂肥後期分施	8.2	9.7	76.0	18.3	356	58.8	101	73.1	90.1	22.3
2:穂肥後期一回	8.2	9.7	76.4	18.5	345	61.5	106	70.3	87.8	22.2
3:穂肥早期分施	8.2	9.7	77.1	19.2	386	63.5	109	75.9	88.5	22.4
4:穂肥早期一回	8.2	9.7	76.1	18.5	389	64.2	111	67.2	93.2	22.3
比較)コシヒカリ	8.1	9.7	88.9	18.6	307	58.0	100	86.1	90.9	23.0

注) 基肥: 増加増安1号(14-14-14)、4のみセラコート444M(14-14-14)  
追肥・穂肥: NK化成C-12号(16-0-20)

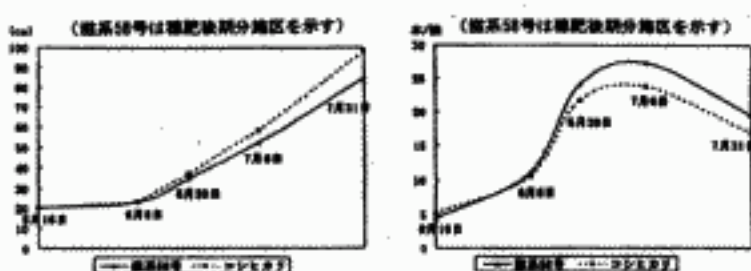


図1 草丈の推移

図2 穂数の推移

表1 収量および収量構成要素

施肥体系	出穂期(月日)	成熟期(月日)	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/㎡)	粒重(g)	同左比率	一穂重(g)	登熟率(%)	千粒重(g)
滋系58号										
1:穂肥後期分施	8.2	9.7	76.0	18.3	356	58.8	101	73.1	90.1	22.3
2:穂肥後期一回	8.2	9.7	76.4	18.5	345	61.5	106	70.3	87.8	22.2
3:穂肥早期分施	8.2	9.7	77.1	19.2	386	63.5	109	75.9	88.5	22.4
4:穂肥早期一回	8.2	9.7	76.1	18.5	389	64.2	111	67.2	93.2	22.3
比較)コシヒカリ	8.1	9.7	88.9	18.6	307	58.0	100	86.1	90.9	23.0

表2 品質調査

施肥体系	品質(1-9)	心白(0-5)	HON値(×100)	蛋白質(%)	アミロース含量(%)
滋系58号					
1:穂肥後期分施	5.5	3.0	0.93	6.76	16.3
2:穂肥後期一回	5.5	3.0	0.93	6.76	15.9
3:穂肥早期分施	5.0	2.5	0.96	6.61	16.4
4:穂肥早期一回	5.5	3.0	0.96	6.51	16.2
比較)コシヒカリ	3.5	0.5	0.97	6.63	16.1

注) \*~\*\*\* 粉砕した白米を用いて測定  
\*、\*\* 近赤外分光分析計(NIRS-6500)で測定、  
HON値は定数×Mg複合体 / K複合体×N複合体で示される数値  
\*\*\* オートアナライザー(II型)で測定

## 2. 結果および考察

1) 草丈は生育初期からコシヒカリとの差が徐々に現れた(図1)。

茎数は、コシヒカリ比較区と比べ、6月上旬まで差がなかった。しかしそれ以降7月6日では一株当たり3.6本3割程度の差、最終的には、2.5本2割程度の差と、コシヒカリに比べ多目に推移した(図2)。

2) 軽度の倒伏が見られたコシヒカリと比較すれば、全区とも稈長は約12cm短く、倒伏に結びつくことはなかった(図3)。

3) 滋系58号はコシヒカリより全区で、㎡当たり穂数が多く、一穂当たり粒数と千粒重が少ない傾向だった。特に穂肥早期分施区、穂肥早期一回区で穂数が多く、多収となった(表1)。

4) 外観品質は、全区でコシヒカリに比べ心白が目立った。

HON値及び蛋白質含量の両方において、穂肥早期分施区と穂肥早期一回区が良好な傾向が見られた。一方アミロース値は、全体的に明かな差は見られなかった(表2)。

5) 農業試験場栽培部を中心としたパネラー11名でコシヒカリを基準として官能食味試験を行ったところ、総合評価で全区ともコシヒカリとほぼ変わらない結果が得られた(図4)。

以上の結果より、多収、食味向上が期待できる早期穂肥の施肥設計が本系統では有望と思われる。

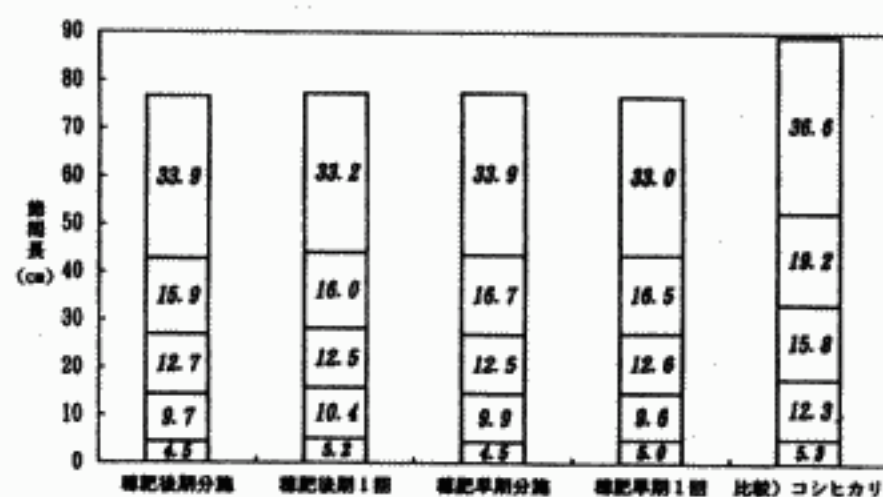


図3 節間長調査

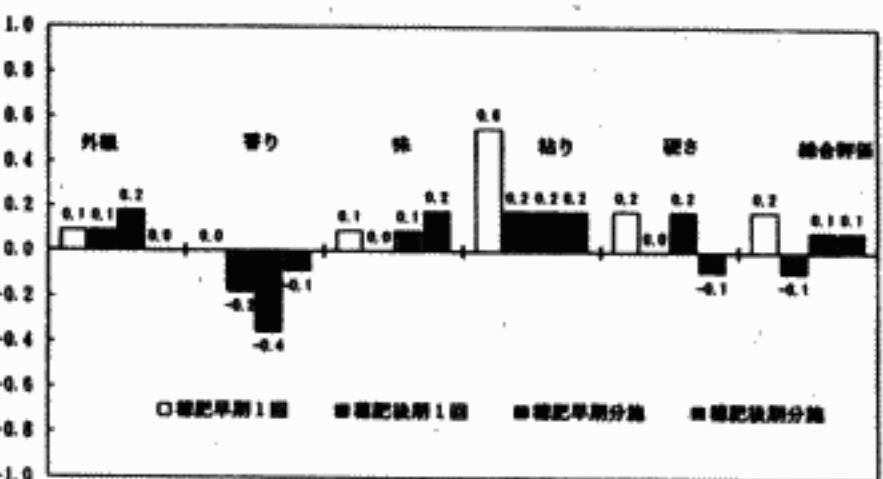


図4 官能による食味評価(比較コシヒカリが標準)